

昭和19-20年におけるプロ野球の非公式戦研究

— 戦時下のスポーツの一側面について —

玉置 通夫 (立命館大学非常勤講師)

Study of unofficial professional baseball games held in 1944-1945 — One aspect of wartime sports —

TAMAKI Michio
(Ritsumeikan University)

1. はじめに

1941 (昭和16、以後19は省略) 年から始まった米国や英国など連合国側との戦争¹⁾ が苛烈を極めた44 (昭和19) 年は、4月以降、相撲や柔道、剣道などの武道以外のスポーツが公式的に殆ど行われず、完全な逼塞状態に置かれた時代であった。そんな中、細々と公式戦を続けてきた職業野球 (現在のプロ野球) も8月いっぱい打ち切れ、休止状態に追い込まれた。以後、翌45年11月に行われた東西対抗戦までの1年余について、プロ野球の歩みを記録した最新の正史²⁾ には、リーグ戦が続行不能になり、日本連盟野球報国会 (以後連盟) も業務停止に追い込まれた後、45年の1月1日から5日まで関西地区で連合チームによるオープン戦の「正月野球」が行なわれ、同年3月14日にも試合が予定されていたもの的大阪大空襲のため中止になったとの記述があり、阪神タイガースと阪急ブレーブス、南海ホークスの各球団史³⁾ や研究者らの著書⁴⁾ にも紹介されている。

しかし、連合チームによる有料のオープン戦は、44年10月から始まり、正月大会の8試合 (空襲警報発令に伴い打ち切られた未成立試合を除く) 以前にも18試合が行われたことについては、山室寛之の著書⁵⁾ が触れている程度で、正史の記

述するプロ野球史からは無視された形になっている。このため、究極とも思えるオープン戦の実態や意味合いを考証することは、資料の乏しい戦時下のスポーツ史研究にとって有益であると確信する。

2. 究極のオープン戦

44 (昭和19) 年度の職業野球夏季公式戦は、44年8月30日に終わり、9月から秋季公式戦が予定されていたものの、6球団の選手は応召で離脱が相次ぎ、チーム編成すら出来ない球団も出始めていた。このため、連盟は、9月に入ると甲子園球場 (以下甲子園、9日-11日)、後楽園球場 (17日-20日)、西宮球場 (以下西宮、24日-26日) で総進軍優勝大会を開いた。連合チームを作ったオープン戦であり、総進軍と言う名称は勇ましいが、職業野球健在を訴えながら事実上の解散をアピールする試合でもあった。西宮における大会の初日に当たる9月24日に44年度優勝の阪神⁶⁾ や首位打者などの表彰を行い、職業野球の今季公式戦終了を正式に発表した。26日に総進軍大会が終了すると、以後、連盟も活動を休止し、応召せずに残った選手たちは親会社である電鉄の機関区や軍需工場などで「産業戦士」として働くのが日課となり、職業野球は完全に「休眠状態」になった

と前出の正史は記述している。

しかし、10月1日から3ヶ月余りに亘って、甲子園と西宮を使って細々と連合チームによるオープン戦が行われたのである。当時、この両球場とともに職業野球を定期的に行う球場として残存していた後楽園は、首都防衛の高射砲陣地の部隊が駐屯していたため、野球場としての機能は失われ、試合をやりたくても出来ない状況に追い込まれていた。後楽園以外にも首都圏で野球が出来る場所は皆無ではなかったが、首都の方が空襲を受け易く、さらに関西と東京間の列車の運行が不安定化しており、切符の入手など困難な状況であることを考えれば、グラウンドや観客席が軍事施設化されていない関西の甲子園と西宮だけがオープン戦の舞台に選ばれたのは当然といえる。

また、44年の公式戦を戦った6球団のうち、東京に本拠地があるのは巨人だけで、阪神、阪急、朝日、近畿（南海から改称）に産業（名古屋から改称）が加われば関西地区で試合が可能になる状況だったことも、非常時のオープン戦が実現出来た要因の一つと考えられる。このほか、敵性スポーツの最たるものとして、再三職業野球に干渉してきた陸軍広報部も職業野球は完全に休止したと思いついていたとも考えられ、職業野球が無視しても良いような人気のない存在だったことも相俟って、このオープン戦に中止命令を出した事実は確認されていない。南方の戦線が次々と陥落し、本土への日常的な空襲が迫っていたが、資料や選手たちの証言などから付度すれば、可能な限り野球をしたいという選手たちの熱情と連盟関西事務所や各球団幹部の努力がオープン戦へ駆り立てたと見てよい。

3. 試合の実相

当時、甲子園と西宮がある兵庫県西宮市の情報に最も詳しくあったのは、地元紙の神戸新聞である。全国紙と同様、用紙不足のため、表裏2ページだけだったが、検証することが出来る有力資料の一つだ。その紙面を基に調べて見ると、試合が行われたのは、10月1日（甲子園）、同8日、15

日（各西宮）、11月4日（甲子園）、同6日、12日（各西宮）、同19日、23日（各甲子園）、同26日（西宮）、12月3日（甲子園）、45年1月1日（甲子園）、2日、4日（各西宮）5日（甲子園）。10月1日と同15日の試合を除いて、ダブルヘッダーで行われた。12月10日に甲子園で予定されていた試合は、中止の事実や理由についての記述がないものの、空襲に備える非常措置のために国民学校（現小学校）や中学校、興行場（映画館などを指すとみられる）が休校や休場になっていることから、取り消されたことと見られ、記録の掲載が見当たらない。また、1月3日は甲子園で試合が行われたが、五回表で空襲警報が発令されたため中止となっており⁷⁾、試合としては成立していないため、試合数には数えられない。このため、確認出来る試合数は、計26試合ということになる。

これ以外にも、試合が行われた可能性は完全には否定できない。しかし、社会情勢を考えれば、現段階ではこの26試合がオープン戦総数と考えられる。このうち、当時、大阪医学専門学校（現大阪大学）の学生だった伊藤利清氏が計21試合（うち1試合は空襲警報発令のため途中打ち切り）を観戦し、克明な記録を記したスコアブック（以後伊藤記録）が現存する。神戸新聞の記事ではインニングスコア、投手と捕手の名前しか記録されていないため、試合の全容が分かる記録は、伊藤記録以外には現存しておらず、貴重な一次資料である。このため、以下の論考は伊藤記録を基本資料として検証することにする。

10月1日、阪神・近鉄連合-阪急・朝日連合の試合が甲子園で行われた。日曜日で晴天に恵まれ、観客は「普通」と記されている。公式記録員も不在のため、21試合のスコアには人数について、「少し、普通、多シ」という伊藤氏の私見による記述が見られる。連盟が纏めた44年度公式戦の1試合平均有料入場者は約1596人である点⁸⁾を参考にすれば、少しは1000人以下、普通は1600人程度、多シは2000人から3000人ぐらいとみてよいだろう。このため、この日の入場者は1600人程度だったのではないかと類推することが出来る。午

後2時45分、川久保喜一球審の右手が上がってプレーボール。内藤（朝日）は塚本、辻（ともに阪神）を三振、左飛にしとめたが、本堂（阪神）に四球を与え、藤村（阪神）の左中間二塁打で1点を失い、2回にも岡村（近鉄）の右中間三塁打を足がかりに失点。5回にも三塁打と野選で1点を失った。一方、若林（阪神）は4回、坪内（朝日）の三遊間安打などによる2死1、2塁から内野ゴロ失で1点を失ったものの、打たせて取る投球で散発6安打の快投。内藤は9回、三塁打3本を含む5安打で5点を失い、試合を一方的にしまった。両軍合わせて17安打が飛び交ったが、試合時間は1時間15分しかかかっていない。全員が早いカウントから積極的に打ったため、1リーグ時代の特徴を反映している。また、伊藤記録には直接言及されていないが、当時の球種は直球とカーブが主体で、投球の間合いが短かったことも、試合短縮に貢献しているのは間違いない。攻撃のサインも単純なものが多く、ユニホームのベルトを触ったのでバント（バンドと発音する選手が多かったためと見られる）、といった類が殆どだった。現在は多用されるヒットエンドランやバスターといった戦法も皆無といってよく、攻守交代も全力疾走でスピードアップに努めていた⁹⁾ことも加味して考えることが、1時間15分の検証には不可欠である。

このようにして始まった究極のオープン戦は、10月15日が午後2時11分に開始されているほかは、各ダブルヘッダーとも午後零時40分前後に始まり、午後4時まで終了している。とくに空襲を意識して速い試合運びを心がけた訳ではなく、当時は、それが基準値であったことを考慮すれば、とくに観客から淡白すぎるなど不満の声が漏れたとの記述は見当たらない。「むしろ、野球の試合を見られるだけで幸せといった感情が強かったのではないかと。球場は戦時下と思えない和やかな雰囲気だった」と、伊藤は回想している¹⁰⁾。

オープン戦は着実に日程を消化したが、12月になると全国的に都市部への空襲が常態化し始め、45年の1月3日には試合途中で空襲警報が発令さ

れ、打ち切られる事態になった。伊藤記録には「(5回裏2死1、2塁となった場面=筆者注)ここで突然警戒警報が発令され惜しくも仕合¹¹⁾は中止となった」(原文のまま)とだけ戦記欄に書かれている。試合終了時間は午後1時51分となっており、観客の大きな動揺や混乱の有無についての記述は見当たらない。実際の空襲はなかったとはいえ試合中に警報によって中止になる実害が出たことは、改めて厳しい戦時下であることを再認識させられた出来事だったことは間違いない。

4. 選手の実相

伊藤記録にある途中打ち切りを除く計20試合に出場した選手は、47人に上る。関西大出身の巨人・黒澤俊夫が1試合だけ飛び入り出場した以外は、阪神（塚本博睦、辻源兵衛、本堂安次、藤村富美男、若林忠志、中野道義、金田正泰、呉昌征、門前真佐人、川北逸三）、阪急（野口明、木暮英路、安田信夫、山田伝、大平茂、上田藤夫、坂田清春、三木久一、榎並達郎、畑中時雄、西村正夫、松本泰三）、近鉄（岡村俊昭、鬼頭勝治、松川博爾、八木進、荒木正、野口渉、吉川義次、清水秀雄）、朝日（西澤政夫、坪内道則、金光淋夫、田中豊一、内藤幸三、田端美夫、菊矢吉男、廣田修三、大橋一郎、仁木安）、産業（加藤正二、藤野義登、金山次郎、松尾幸造、井上嘉弘、大澤紀三男）の選手だ。このうち、目立つ活躍を見せたのは、藤村、金田、若林、呉（以上阪神）、岡村（近畿）、野口、上田（以上阪急）、坪内、酒澤（以上朝日）、松尾（産業）。とくに、若林は11試合に登板して8勝3敗、防御率2.77、打者としても12試合で打率3割7分の記録を残している。呉も8試合に登板で7勝1敗、防御率1.52、打者としても14試合に出場しており、本塁打1本を放ち、計5回も殊勲賞を獲得している。さらに藤村は、20試合に出て打率3割7分4厘、打点30の好成績をあげ、殊勲賞に2回選ばれている¹²⁾。記録がない6試合を含めなければ全体像は掴めないが、食料事情が切迫し、空襲への恐怖も増幅される中で、選手たちが懸命に繰り広げたプ

レーぶりが伝わってくる。召集令状が来て戦地へ赴かなければならない緊張感もあって、野球が出来る幸福感を味わいながらの試合であったことは容易に理解できる。

5. オープン戦が出来た理由

それでは、なぜこのような試合が出来たのだろうか。1936（昭和11）年の職業野球リーグ発足以来、関西では阪神、阪急の私鉄会社が運営に深く関わってきた。とくに球団幹部として活躍していた阪急の村上実代表、阪神の富樫興一代表と田中義一常務と連盟関西事務所の小島善平支部長は、選手たちが野球続行に情熱を持っていることを知っており、なんとか関西だけでもプロ野球の火を燃やし続けたいと考えていたからだ。村上は「熱心なファンに支えられてきたのだから、なんとか出来る限りは試合をしようという気持ちで、各球団と話し合った。選手たちに最後だという悲壮感はなかった」と語っている¹³⁾。また、オープン戦に出場した中野道義（阪神）は「田中さんが中心になって実現できた。在阪チームだけでも持ちこたえようと田中さんが言っていた」と回想している¹⁴⁾。選手集めはもとより、甲子園や西宮を使うことのほか、審判の手配、ボールなどの調達、入場料の徴収と管理など、連盟ぐるみの準備がなければ、到底乗り越えられなかったのは確かだ。

このオープン戦について、親会社の阪急、阪神両電鉄の関与を証明するような資料は無い。電鉄本社にしてみれば、応召による職員減で日々の車両整備や運行ダイヤの確保に必死で、駅に試合開催を告知するポスターを貼ることぐらいが精一杯で、人気の無いプロ野球を見に来るファンを意識する余裕もなかったのが実情と推測できる。

10月1日の試合予定を報じた神戸新聞には、「主催 日本野球報国会」の文字があり、正月大会を予告した12月31日の同紙面にも主催の表記はないものの「日本野球関西報国会」の文字がある。また、西宮での正月大会開催を知らせるポスターには、日本野球報国会と印刷されている¹⁵⁾。報国会と関西報国会は同じ組織と見られ、このよ

うにオープン戦といえども試合続行に関与したのならば、正史に「オープン戦が行なわれた」との記述が欠落しているのは理解出来ない。大阪に本部がある日本高等学校野球連盟を除き東京に本部があるスポーツ団体の場合、発行される正史はどうしても東京中心の目線で記述されがちだ。このオープン戦に対する記述の欠落も、そのような要素があると推測できる。

当時、西宮の1塁側スタンドの下が臨時の倉庫になっており、大阪市北区梅田の阪急百貨店の物資を空襲に備えて移動させていた。このため、このスタンド下には、新品のバットや硬球などが揃っており、試合に使うことが出来たのも大きい。各試合は関西在住の金政卯一、川久保喜一両審判がジャッジをしている（元日の2試合のみ金政と益田。益田の名は不明）。しかし、試合の模様を記録する公式記録員は確保出来なかった模様で、オープン戦26試合の正式なスコアブックは確認されていない。

6. まとめ

45年の正月大会が終了した後も、選手たちは球団の関連会社などで働きながら、試合再開に期待を寄せていた。しかし、戦局は壊滅的になる一方で、日常生活さえ覚束無い状況となり、工場労働に汗を流す毎日だった選手たちは、昼休みを利用してキャッチボールをして憂さを晴らしたという。阪神の親会社である阪神電鉄の尼崎車両区で車両の点検、補修作業を手伝っていた門前真佐人は「若林さんは、野球再開の日がきっと来る、が口癖で、昼休みになると私を相手にキャッチボールをするのが楽しみだった。ナックルやシンカーなどの変化球を投げ、切れを試していた。その時間が一番楽しかった」と述懐している¹⁶⁾。試合は絶望的になっても、野球への情熱を失わなかった選手たちがいた証左になる証言だ。

さらに、選手や伊藤の証言などから、3月14日に試合を行う計画があったことも明らかになっている¹⁷⁾。流石に観衆を入れて有料試合を行うだけの余裕もなくなっており、西宮で非公開と決めら

れた。有料試合を諦めても、野球をすることに拘った選手たちの心情が見て取れる。伊藤の日記によると、前日の13日に甲子園の阪神タイガース球団事務所で富樫興一代表に試合の確認をし、球場前のバス停で偶然、藤村富美男に会った。「明日は試合ですね」と聞くと、「来てください」といわれたという。一方、奈良県御所市にチームごと疎開していた坪内道則は「いよいよ明日だと嬉しくなって、駅前の旅館でマージャンをした。ところが早朝になって大阪行きの汽車が不通になったことが分かり、がっかりした」と話している¹⁸⁾。13日深更から14日未明にかけての大阪大空襲で近隣の交通網もズタズタになってしまった。これでは、とても野球どころではなくこの試みは、幻に終わり、以後、戦局は、沖縄も米軍に完全制圧されるなど防戦一方となり、とことんまで頑張り続けたプロ野球界は完全に息の根を止められてしまった。

以上、見てきたように、オープン戦は、出来るだけ長く野球をやりたいという選手たちの意向を汲んだ球団関係者の協力で実行された。西宮に阪急百貨店のボールなどが避難していたのも大きい。さらに、1942（昭和17）年ごろから露骨に介入してきた陸軍省も、なんの反応も示さなくなっていたのも幸運だった。元日の試合に新品の米国製バットを使っても、なんの咎めもなかったことも、その証左になる¹⁹⁾。このようにして実行された究極とも言えるオープン戦は、45年11月の東西対抗、翌年の公式戦再開と戦後いち早くプロ野球が立ち上がるエネルギーになったと結論付けられる。

註

- 1) 1941年12月8日に始まった日本と米英などとの戦争は、12月10日の閣議で「大東亜戦争」と命名された。戦後、占領軍の指導などで「太平洋戦争」と呼称されることが多いが、名称変更の閣議決定はされていない。
- 2) ベースボールマガジン社編「日本プロ野球70年史歴史編」（ベースボールマガジン社2004年）65ページ。それ以前の馬立龍雄編「プロ野球25年」（報知新聞社1961年）、田中茂光編「定本プロ野球40年」（報知新聞社1976年）、ベースボールマガジン社編「日本プロ野球40年史」（ベースボールマガジン社1976年）、同編「日本プロ野球50年史」（ベースボールマガジン社1984年）には、正月野球やオープン戦の記述は見当たらない。
- 3) 「阪神タイガースー昭和のあゆみ」（1991年）115ページ—117ページ、「阪急ブレーブス五十年史」（1987年）88ページ、「南海ホークス四十年史」（1978年）57ページ。
- 4) 鈴木明「プロ野球を変えた男たち」（1983年、新潮社）87ページ—92ページ、広畑成志「終戦のラストゲームー戦時下のプロ野球を追って」（2005年、本の泉社）9ページ—26ページ。広畑の著書は阪神電鉄を軍事産業と記すなど事実誤認が多い。
- 5) 山室寛之「背番号なし戦闘帽の野球ー戦時下の日本野球1936-1946」（2015年、ベースボールマガジン社）272ページ—276ページ。山室は小島の私信や日記を資料にして著述しているが、なぜオープン戦が出来たのかについては論考していない。
- 6) 阪神は、大阪タイガースとして発足。1940（昭和15）年から45までは球団名の日本語化に伴い阪神、46年から大阪タイガースを復活させたが、1961（昭和36）年に阪神タイガースと改称した。本稿の球団名は、阪神に統一した。
- 7) 伊藤記録による。

- 8) プロ野球25年102ページ。
- 9) 宇佐美徹也「プロ野球記録大鑑」(1993年、講談社) 182-183ページ。
- 10) 83年9月1日、筆者の取材。
- 11) 戦前は、試合を仕合と表記することが多かった。
- 12) 伊藤記録によれば、各試合に殊勲賞の記述があるが、金銭なのか物品かは不明。
- 13) 84年2月14日、村上実に対する筆者の取材
- 14) 83年11月2日、中野道義に対する筆者の取材。
- 15) 阪急ブレーブス編「阪急ブレーブス五十年史」(阪急ブレーブス87年、) 88ページ。
- 16) 83年7月30日と9月5日、門前真佐人への筆者の取材
- 17) 1月5日の試合終了後、阪神の田中義一常務が各選手に「今度は3月に会おう」と話していたという。(83年11月2日、中野道義への筆者の取材)
- 18) 84年2月25日、坪内道則に対する筆者の取材。
- 19) 83年11月2日、中野道義に対する筆者の取材。

(2016年1月25日受付)
(2017年10月16日受理)